九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

《中国文学批評通史》緒論訳注 : 《清代文学批評史・緒論》訳注（上）

甲斐, 勝二
福岡大学人文学部

東, 英寿
鹿児島大学法文学部

https://hdl.handle.net/2324/19713

出版情報：福岡大学人文論叢. 33 (4), pp.2301-2318, 2002-03. 福岡大学研究推進部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

《中国文学批評通史》緒論訳注

《清代文学批評史・緒論》訳注（上）

甲斐　勝二
東　　英寿（鹿児島大学法文学部助教授）

翻訳にあたって

現在我々がその緒論の訳注を続けている《中国文学批評通史》は、中国は上海の復旦大学中文系古代文学批評史教研究室の王運熙・顧易生教授を主編として編集されたものである。全7巻8冊、上海古籍出版社から出版され、中国文学批評研究では近年の大きな成果として非常に高い評価を得ている。今回訳出する緒論を掲載する《清代文学批評史》は、1995年11月の出版である。中国最後の王朝清朝の創建から1840年アヘン戦争の勃発までを時期として、この時期に登場した重要な文学論を紹介しており、復旦大学中文系の烏国平・王鎮遠両先生の執筆に成る。ここに、訳出した緒論は、烏国平・王鎮遠両先生の共同執筆とのこと、説明に見える。なお、参考までに章立てを記しておく。第一章緒論、第二章明清之際思想家的文学批評、第三章明清之際文人的詩文批評、第四章明清之際戯曲小説批評大師、第五章清代前期的詩論、第六章清代前期的文論、第七章清代中期的詩論、第八章清代中期的文論、第九章詞論、第十章戯曲批評、第十一章小説批評と並んでいる。

今回の訳注は、鹿児島大学の東が原稿を作り、本学の甲斐がその訳文・注文を本文につき合わせて改めた。二人で見ているので、誤訳や間違いは少ないとは思うが、二人とも清代は専門外で、注にしても不十分な所が多いのではないかと心配している。訳文および注文の至らぬ所はご容赦を願うと共に、小生どもも今後の研鑽につとめて、さらに充実した訳注を試みる機会を得ることを願っている。関係する諸先生方のご教示をお願いしたい。

《清代文学批評史・緒論》

中国が封建社会末期に生み出した清代の文学批評は、過去の歴史のほぼあらゆる文学批評の概念・術語・範囲・命題らを踏襲利用しており、決してその文学観念の根本に質的変化をもたらすことはなかった。しかし、この事は清代文学批評そのものの豊富さ、深さ及び我が国の古代文学批評史上最後の一段落が持つ（その他の部分は近代文学批評とする）特に重要な意義に影響を与えることはなかった。およそ 200 年以上の歴史の中で、文学批評は著名人を輩出し、流派が入り乱れ、理論の著作と単篇の論文や資料がとりわけ多く出回った。清代は伝統文化や学術の総括と集大成の段階にあり、文学批評にもこのような特徴が現れている。批評家は往々にして大きい度量と広大な視野とを備えており、博識さには筋が通り、たくさんの流派を広く受け入れていた。彼らは互いの間でもよく意見交換や討議を行い、異なった流派や主張も自然と変化、交替したが、しかし一般的に比較的温和な変化と発展を表しており、対抗や断絶するかわりに相手の意見を汲み取る事で自説を補正したのである。この点は明代の文学批評と比較するととりわけ明快ではっきりしている。理学(1)の思弁と樸学(2)の実証という両種の研究方法の影響を受けて、清代の文学批評家は道理を論じたり説明するのを得意とし、理論と実際性という虚実を互いに補いあい、論には必ず根拠があり、抽象的で空虚な議論に陥る事がほとんどなく、本当に詳細豊富で奥深い理論に富んでいた。彼らの批評理論もまた全体的にみるなら思想や学識が広く深く、周到綿密かつ詳細、初歩的な系統性を持つという特色を示している。

清代文学批評は以下の 3 つの段階に分けることができる。明清の交替期、前期、中期（アヘン戦争以後は後期に属するので《近代文学批評史》巻に入れ、本巻では論述しない）。明清交替期とは明から清へ入って順治年間までを指す。康熙・雍正の期間が前期となり、乾隆・嘉慶と道光のはじめ（1840 年アヘン戦争勃発の前）が中期である(3)。このような区分は当然ながら粗略なものであり完全というわけではない。この区分のはっきりした欠点は例えば文学批評の前後に相続く諸々の複雑なつながりが容易に覆い隠されてしまうことであり、また例えば時代の区分を越えて活躍した文学批評家はこの種の区分では処理し難いのである。（康熙・雍正・乾隆の三王朝を自ら経験している沈徳潜(4)はその目立った一例である。）とはいうものの、清代文学批評の各段階での異なった特徴はやはりはっきりと分かれている。文学批評の発展の軌跡の中で批評家個人のだいたいの位置を決めることも、彼らが唱える文学主張の実質及び意義の理解と把握をまた助けるのである。この区

分が欠点となるところについては、我々は具体的な論述の中で可能な限り埋め補うことにしたい。

一、明清交替期の文学批評の特徴

明末に起こった経世致用(5)の思潮は、明清交替期の激変を経て、さらに勢力が強まり大きなうねりとなった。これも必然的に文学批評の中に反映されてくる。多くの批評家自身が積極的に抗清運動に身を投じた志士に他ならず、文学の現実社会への全面介入を強烈に唱えて、空虚で上っ調子な文風を非難した。その後、清の人々が中原に入り込み、中原を支配する大勢が次第に確立するにしたがって、彼らの中の多くが主要な精力を著述に費し、明朝が滅亡した教訓を探求した。文学批評の拡大も、さらにその中の有機的な構成部分の一つであって、時世に有益な文風を形成することを希望するものだった。片手に筆をとり、両眼は世を眺めながら、心中にからみつくものはやはり天下に筋道を立てようという大きな志なのであった。これがこの段階の文学批評に思想内容の方面において特別鮮明な政治的・道徳的な主題を持たせたのである。

文学の時代意義と社会作用を重視し、詩文の経世致用という目的を強調しようとすることと現実を批判する精神を提唱することが、この時期の文学批評の中で最も強い響きであった。黄宗羲(6)は時代の情勢が文学に与える影響について繰り返し指摘し、とくに激烈な社会変動が文学創作の繁栄を導くことを特に強調した。そして漢代以後において、魏晋、唐の天宝年間（742～755、玄宗皇帝の御代）以後、宋末これを文学の三つの高揚期であるとみなし、「陽気が下にたまり、重なった黒雲がこれをふさげば、ぶつかって雷が生じる。」(7)（《縮齋文集序》）の言葉でたとえたのは、国が戦に破れ一家離散のとき、剛直な民族の気骨は必然的に凝集されて抑えきれない感情の火花となって詩文の中にほとばしることなのだ。顧炎武(8)は「文は天下に益するところがなければならぬ。」(9)（《日知録》(10)巻19）と呼びかけることで、詩歌の政治を諷刺し諫めまた意見を示すという作用を重視して、詩歌が現実を反映し、現実を批判するという伝統を提唱した。王夫之(11)は詩歌の持つ「興・観・群・怨」(12)という社会作用を重視して、比と興(13)の手法を提唱したが、その思いはやはり《詩経》や《楚辞》の中の現実を批判する精神を発揚することにあったのだ。銭謙益(14)は詩文を論じるに、精神、世運と学識の三つの方面を掲げた（《評杜蒼略自評詩文》）。いわゆる世運とは、すなわち時代の盛衰昇降が文学に与える影響を強調する事である。傅山(15)は多くの文章家に「河嶽」の「気」(16)に注目して、苦難と危機の

時代に「波濤」となる気迫のこもった文章を書き表すべきことを求めた。(《偶借法字翻杜句答補厳》の二)

時代の変化のめまぐるしさがため、自ずから士人が名教と節義を持つことを標榜する風潮が導かれた。よって明清交替期では文人のほとんどが人品の修養を非常に強調した。それが文論の中では詩文の品格と人格の統一を十分に重視して、その人の真の性情を表現するように求めるものとなって表われた。彼らが言うところの性情は、その具体的な内容はしばしば時代の精神と現実の内容とを互いに結合したものとなっている。たとえ個性の観念が表現されるところがなおあったとしても、例えば傅山は独立した人格精神を褒め称えたけれども、しかしこの時期の文学批評における人格論を大きく見ると、個人の色彩は他に比らべて決して突出したものではなく、顕著なものは集体的理性の精神の方なのである。これは、同様に性情を提唱した晩明の批評家たちがその表現を主張した個人そのものの性霊と欲念、及び次世代の袁枚(17)らが表現しようとした人の各種の情感などとは皆はっきりした区別がある。

明末清初の思想家は、晩明の文人がもつ異端的傾向と当時の文学の中にあった儒家の義理の伝統にもとる要素に猛烈に反論した。これが社会の衰退を導き出し、ついに明朝の滅亡を引き起こした重要な原因と考えたのである。故に彼らは「経に返り本に帰れ」のスローガンの下、儒家の学説に対し大規模な解釈と回帰を開始し、「時代の勢い」に対して全面的な反発を行ったのだ。文学批評にあっては、積極的に正統的で規範的な儒家の倫理道徳観と価値観が提唱され、晩明の文人が法則に背き心情を放任したことをつとめてただしたので、晩明文学と文学思想の中で生まれてきた個性の意識と世俗的傾向は明らかな抑制を受けたのである。清代前期に形成されかつ後に長期に亘って影響を与えた文学批評の中の「清醇雅正」(18)論は、本質的には清代の統治者の文化政策を体現したものだが、この種の思想の由来を求めれば、明清交替期に文人が上述した文学の価値の趣向ともまた一定の関係があるのだ。たとえ両者の具体的な目的には大きな隔たりがあったとしても。かくして晩明の文学思潮から清代の伝統的文学の意識へと回転するというこの過程の中で、明清交替期は重要な一段階を占めるのである。

文学における継承すべきまた師とすべき対象については、明末清初の作家は往々にして固定せず先人たちの良いところを兼ねてとる態度を持っていた。明人がそれぞれ派閥を立て、見解立場を異にするものを攻撃するという弊害はすでに人々にひどく嫌われていたし、さらに文学における派閥の争いや模倣因襲を取り入れる気風もまた有識の士に相手にされ

るものではない。黄宗羲は「春の蘭、秋の菊は、各々自から家を成す。」（《銭退山詩文序》）と唱えた。顧炎武もまた詩文は時代によって変るものとし、過去の模倣を取り入れることに反対した。王夫之の場合は「派閥を立てる者は必ず飾り立てる」（《夕堂永日緒論・内篇》）といい、明代の七子及び反七子の各派がそれぞれ自ら高く標榜した集団意識に対して強引に排斥を加えた。詩歌が師とする対象については、清初の文人は明人とは異なる領域があった。例えば銭謙益は多数の明人の「詩は必ず盛唐を師とせよ」の説に反対して、宋詩をもみならって別の道を切り開くことを主張し、「多くの師を持つことは益になる」という態度を提唱した。彼や黄宗羲は皆宋末の謝翺(19)、林景熙(20)、汪元量(21)らの詩を大変重視した。これは精神的には南宋遺民への共感からでたものだけれども、しかし客観的には清代における宋代の風気の提唱を導くことになった。その当時には馮班(22)らの人が晩唐を広く褒め称え西崑体を提唱していたし、また呉偉業(23)らも七子を継承して盛唐を尊敬していたし、更に屈大均(24)は屈原に私淑していたし、賀貽孫(25)らは陶潜に心酔している。しかし当時比較的普遍的に強く憧れられたのは、杜甫であった。例えば、顧炎武、朱鶴齢(26)、傅山、呉偉業、申涵光(27)、金聖嘆(28)などは皆杜甫の詩歌を高く評価している。いわゆる宋を慕っていた銭謙益、黄宗羲であっても、杜甫の詩の現実精神と沈鬱で屈折に富む芸術風格を認めている。散文の理論の中では当時の明の七子の弊害と公安派(29)、竟陵派(30)の文風に対する不満によって、古文家のほとんどが唐宋の散文に回帰した。その最初は帰有光(31)によって唐宋八大家に溯ろうとしたことに表れる。当然ながら、明清交替期の文人たちは先人を継承したり師としたりすることを論したが、その目的は新しいものを作ることへの追求であり、自己の時代の詩人を作り出すことにあった。ここにこそ彼らの批判的参照(32)論の最も肝腰な部分があったのだ。

二、前期の文学批評の新変

もし明清交替期の文人が文学と社会現実、文学と人品などの外部との関係及び文学の継承と発展の問題における討論を比較的重視したというならば、康熙、雍正の時期の批評は、さらに文学そのものについてより多く討論したという傾向を持つ。この時期、清朝では既に相対的な安定と強大な情勢が現れていた。統治者は一方で博学鴻詞科(33)や図書の編修などの道でもって文学の士を丸め込んで利用していたが、他の一方ではまた文字の獄(34)を起こし、血なまぐさい殺戮でもって世論や思想を牽制した。このような環境の中で文人は自然に現実問題に対して口をつぐんで物を言えず、しかも政治の安定によって出現した

文学の繁栄は、文学の芸術的特性と創作手法などの問題に対して理論の総括を加える事を要求する。そこで、詩文の格律と風格に注意をむけた討論も流行しだした。

清に入って以降、詩壇において「国初六家」（施閏章(35)・宋琬(36)・朱彝尊(37)・王士禎(38)・趙執信(39)・査慎行(40)）のようやく始った活躍は、この時期の詩歌創作及び詩歌理論の代表だという事が出来る。康熙・雍正年間の文壇で活躍した桐城派(41)の前期の作者戴名世(42)・方苞(43)は、散文の気風の転換を代表した。詞学にもまたはつらつとした生気が現れた。そして陳維崧(44)・朱彝尊はそれぞれ最も影響力のある詞人と批評家となった。

王士禎の神韻説は康熙年間に影響を与えた最大の詩歌理論であり、世の中の変遷への戸惑いや、母国の混乱からくる辛さが減少した後にあって、文人の創作のいわゆる「盛世之音」を体現した。時世が異なるがために王士禎の創作と理論では、前の時期の気風が一変され、もはや慷慨の熱情があふれ大声で叫び主張することで互いにほめたたえる事はなく、一種の優雅で上品さ典雅で含蓄のある風格に変った。彼が神韻を掲げ盛唐を尊び、司空図(45)と厳羽(46)の詩論を高く評価したのは、みなこのような雅正であり優美な風情を持ち、しかも淡泊ながらも含蓄がある詩風を提唱するためだ。これは実際王士禎一人の見解ではなく、一種の時代の審美的気風ということができる。例えば、王士禎よりやや早く施閏章もまた「温柔であり博学で高雅、典麗にして穏やかな性質」（《徐伯調五言律序》）である事を尊んだ。王士禎と時を同じくして名高い葉燮(47)の詩論もまた雅正を重視し、詩歌は平易な言葉を用いながら深く心を込めるべきだと考えて、彼はとりわけ雅風を推賞し、「雅なるものは、作詩の源であり、さらに詩の流れを尽くすことができる」と言っている。（《汪秋原浪齋二集詩序》）王士禎の審美的趣向と近いことがわかる。

散文を批評する中では、唐宋古文の提唱がいっそう突出している。「清初三大家」－候方域(48)・汪琬(49)・魏禧(50)の各人の経歴と文風はそれぞれ異なるが。しかし唐宋の文学伝統を敬い、明代の「文は必ず秦漢」の説と小品文一派の影響を一掃しようとする事については、彼らはおおかたよく似た趣旨を持っていた。その中で魏禧は方法を取ることがより広く、秦漢と唐宋の両派の傾向を混ぜ合わせている。創作主体に対する要求については、候方域は才情を重んじ、汪琬は学力を尊び、基準に厳しく、魏禧は道理と見識を強調して、共に当時の文風に対して影響を与えている。廖燕(51)は彼らと比べて、世代はやや若い。彼の文学思想には主流に背く思想や行為を含んでいる。その名声は高くはないけれども、注意される価値がある。

当時を代表する散文創作の正当派は簡潔雅正な文風であり、またこれに随って生じた桐

城派古文である。朱彝尊は文章の体裁が簡潔にして正しいものであることを求めた。（《答胡司臬書》）桐城派の先駆者戴名世は文を論じて平質自然で、雅かつ清であるよう力説した。当時、蔡世遠(52)が《古文雅正》を編纂し、方苞が《欽定四書文》を編修し、みな清真雅正の基準を尊んでいるが、これは一方で統治者が恣意的な議論やくだらない反駁を排斥することの表れであり、もう一方ではまた一種の時代の審美的な風潮の形成が表現されている。方苞の雅潔論は、醇雅簡潔にしてさらに我慢強く味わいのある文風を提唱するところにねらいがあり、文章の内容が整えられていながら言葉は精錬され高尚であることを要求した。

康熙年間の詞学流行の情勢もまた醇雅を標準とする気風と関連している。浙西詞派(53)の朱彝尊は、詞は雅正に帰すのだと論じ、汪森(54)の《詞綜序》は朱彝尊に歩を合わせ、姜夔(55)の「字句を研き上げ練り上げて、醇雅に帰す」ことを推賞した。浙西詞派が次第に広がり詞壇の中心となったのは、正に雅に帰すことこそ大勢の動向であったことを示しているのである。陳維崧を首とする陽羨派(56)となると、蘇軾・辛棄疾の豪放な詞格を慕ったけれども、しかし陳氏は雅正の詞に対して期待するところもあって、雅ではない「鄭・衛」の音（詞中のみだらな音楽）や「妓館でうたわれた台本(57)の中の詞」を退けた。（《詞選序》）これらはみな当時の詩文批評の風潮と一致するものである。

康熙18年、清朝政府は士人を篭絡し、また統治の社会的基盤を拡大する必要のために、博学鴻詞科を設けたので、全国の声望ある老学者の多くがある時期に集められた。統治者は盛んな時代の帝業に彩を為すため、《明史》の編集を組織し、《佩文韻府》・《古今図書集成》などの書を編纂した。これによって学風は大きく変化し、文人は学問に心を打ち込むことを現実から逃げたり、精神を充実したりする一つの道とした。同時に康熙帝は理学を尊び、思想上は儒家の経典と宋代儒学の義理を正当なものとした。これが文学批評上においては学問を重視すること、とりわけ経史を根柢とする風潮として表れた。施閏章・朱彝尊・陳玉璂(58)などはみな、これについて特に重点的に強調し、甚だしきに至っては神韻説を主張した王士禎すらも作詩は「興會」と「根柢」から切り離せないとみなした。ここでいわゆる「根柢」とは「学問に原(もと)づく」、「博めるに九経・三史・諸子で以ってし、その変化を窮める」（《突星閣詩集序》）というものである。しかし、これが詩文の創作と審美において雅正に赴く傾向を強化したのは明らかだ。

この時期の文学批評のもう一つの傾向は詩歌、散文、詞の格式作りを重視し、詩・文・詞の芸術を構成する形式の要素である声調格律・文章の組織構造・詞体規則の総括に注意

を向けたことだ。当時大量の詩話が出現したのはこれと関係しており、その中のほとんどで述べていることは詩法であり、中には詩歌の声律の問題を専門に探求するものもあった。例えば王士禎の《律詩定体》・《古詩平仄論》、李鬱文の《律詩四辨》、趙執信の《声調譜》などである。このような内容は当時の人々の文集の中にもしばしば見えるものである。散文理論の方面においては、方苞が創作の中での言葉遣いや、どこを削りどこを詳しくするか、章編の構成のし方などの問題に対して掘り下げて仔細に研究した。彼の所謂「義法」とは即ち文章には充実した内容と適当な表現形式がなくてはならないと主張するものであった。しかし多くの「義法」を説明する彼の言葉はみな「法」に関する討論であり、つまりは文章の具体的作法に他ならなかった。この批評の傾向はその後劉大櫆(59)・姚鼐(60)の形成した技芸を主な探求の対象とする文論の特色に大きく影響を与え、桐城派の散文理論の主なものが、「法」の総括こそすなわち芸術の理論だというものになってしまった。詞学の方面では形式の提唱と研究が盛んになった。清初の詞家はすでに先人の作った詞が詞律を遵守する面において、これを失して奔放であったり、あるいは疎略に流れることに対して不満を示し、詞の格律を厳格に守ることを求めた。浙西詞派と陽羨派はどちらも詞律の音韻の重要さを強調し、納蘭性徳(61)が編集した《詞韻正略》もまた風潮に追随するものである。康熙26年、萬樹(62)は《詞律》を編著した。54年には陳廷敬(63)・王奕清(64)が勅を賜り集団を取りまとめて《欽定詞譜》を編成し、詞の格律形式の規準となる基本の確立を明示した。この時期の詩・文・詞の芸術形式面のこれらの探求と建議すらもまた、文学創作が雅正の方向に向かって発展するよう推進し動かしたのだった。

注

（1）理学：宋代に勃興した儒学。宋代になると従前の絶対的権威を持つ儒学の経典に対して、自由に批判的に研究する風潮が生まれ、儒学は面目を一新するようになった。道学、理気学、性理学、義理学とも言い、南宋の朱熹によって大成されたので、狭義には朱子学を指すこともある。

（2）樸学：明末に生まれ、清代に発展した文献学的な学問、考証学。経書、その他の古典を実証的に研究することを目的とした。

（3）本書では清代における文学批評史の三つの区分として、第3代順治帝

（1643～1661）までを明代から清代への境目とし、第 4 代康熙帝（1661～1722）、第 5 代雍正帝（1722～1735）までを清代前期、第 6 代乾隆帝（1735～1795）、第 7 代嘉慶帝（1795～1820）、第 8 代道光帝（1820～1850）のはじめまでを清代中期とし、1840 年アヘン戦争勃発以降を清代後期とする。

（4）沈徳潜：（1673～1769）字は確士、号は帰愚、江南長洲（江蘇省蘇州）の人。67 才で初めて進士に及第。編修歴官から礼部侍郎に至る。乾隆皇帝にその詩を称賛され、乾隆皇帝は自己の詩集十四冊を沈徳潜に修改潤色させた。若い頃、葉燮の門に学び葉氏の影響を深く受けており、詩論も多方面で葉氏の主張を受け継いでいる。（本書第七章第一節参照）

（5）経世致用：明の万暦年間（1573～1620）頃から社会の混乱や動揺が著しくなったために、学問は社会的に役立つものでなければならないという自覚が起こった。東林学派の経世の学がそれを代表した。東林学派の経世の学の影響と清朝に対する民族的反感とを背景として黄宗羲・顧炎武・王夫之らが輩出し、経書や史書の研究に基づく儒学的政策、制度論が社会変革を目指して議論され、思想史上の大きな流れとなった。

（6）黄宗羲：（1610～1695）。字は太冲、号は南雷、梨洲先生と称された。浙江省余姚県の人。彼は該博な学識を有し、著述は豊富で、哲学、経学、史学、文学等あらゆる分野に及んだ。彼は明朝から清朝への交替期の人であり、若くより東林の同志とともに活躍した。明朝復興の軍事運動を展開したが、平定され事が破れた後は郷里に帰り、講学と叙述の生活を送り、清代浙東学派の風気を開いた。その著に《明夷待訪録》、《明儒学案》、《南雷文案》、《南雷文定》、《南雷詩歴》等がある。（本書第二章第一節参照）

（7）原文は「陽気在下、重陰錮之、則撃而為雷」。明清の激烈な変化は深く黄宗羲の心情を揺るがし、これは彼の文学に対する認識と評価にまで影響した。彼は一般に文学と時代の関係を肯定しているだけでなく、異常な程鮮明に指し示している。社会に激しい動揺が発生し、とりわけ非常な時期には人々の感情は奮い立ち、文学を積極的に進める事で高揚期が形成される。この認識の出発より、「陽気」の文と、「変風変雅」を吹聴するのである。彼が言う「陽気」の文と、「変風変雅」は、実際上歴史において愛国の激情と反抗の意識が凝集した文学作品を指している。（本書 pp36～38 参照）

（8）顧炎武：（1613～1682）。初名は継紳、のち絳と改める。字は忠清。清に入ってから名を炎武とし、字は甯人。昆山（今の江蘇に属す）の人。亭林先生と称される。経世致用の学に優れる。ひたすら経世の務に励み、復社に参加し、清兵が南下すると、抗清活動

を行う。後に長期にわたって北方に遊学し、交友は広い。その著述上の新見解は遊歴中に考察されたものが頗る多い。明滅亡後、清朝に出仕せず、遺老のまま終わる。その研究方法は考証の祖といわれ、清代樸学の風気を開く。著に《天下郡國利病書》、《肇域志》、《音学五書》、《日知録》、《顧亭林詩文集》がある。(本書第二章第二節参照)。

(9)「文須有益天下」: これは顧炎武があらゆる文章をなすものは文学作品と文学作品でないとに関わらず根本的に要求するものである。彼は国が腐敗による危機的状況にあるのに直面して、一切の志有る儒家たちが民を救う責任を負わなければならないとし、彼らが従事する著述活動もまた当然この崇高な目的を果たすべきだとした。「文須有益天下」は正にこのような認識において提出されたスローガンである。(本書第二章第二節参照)

(10)《日知録》: 明の顧炎武の書。経学、政治、財政、歴史、地理、芸文などのあらゆる分野に亘っている。顧炎武自ら「愚わかきより読書して得るところ有れば、すなわちこれを記し、其の合わざる有れば時にまた改定す。古人、我に先じて有るあれば、則ち遂にこれを削る。三十余年を積み、すなわち一編をなす。子夏の言を取り名づけて日知録といい、以て後の君子に正す。」とある。子夏の言は《論語》子張篇にみえる。

(11) 王夫之: (1619〜1692)。字は而農、号は薑斎、湖南衡陽の人。明の崇禎15年の挙人。彼の経歴は学問に励んだ時期、清軍に抵抗した時期、隠遁して著述に励んだ時期の三つに区分できるが、著述に励んだ時期が33歳から死ぬまでの間と最も長い。彼の著述は非常に刻苦し勤め励んで作成されたもので、生涯において百余種の著述に達したが、散逸したものも多い。王夫之の主要な文学批評の論著としては《薑斎詩話》があげられる。(本書第二章第三節参照)

(12)「興・観・群・怨」: 作品の本文に含まれる義と読者の解釈理解の間との関係を探究することは、王夫之の詩歌批評の中でまた重要な内容のひとつである。彼は読者が作品を理解するには個人の自由にまかせるとする。《論語》に言う「興観群怨」(陽貨篇「詩可以興、可以観、可以群、可以怨」の四者から進み出て、読者が自由に詩歌作品を解読することを肯定し、伝統的な命題に対して歴史的な突破をなした。(本書 pp 90〜91 参照)

(13) 比興: 「詩の六義」における比と興のこと。比は表現したい内容を比喩の世界に置き換えてうたうものであり、興は自然界の事物からうたい起こして連想的に人事にうたい及んでいく手法のことである。

(14) 銭謙益: (1582〜1664)。字は受之、号は牧斎、また牧翁、尚湖、蒙叟、絳雲老人、虞山老民、聚沙居士、敬他老人、東澗遺老、聾駮道人等と称す。常熟(今の江蘇)の人。

清朝にて礼部侍郎管秘書院事となったが、しかし清に降伏した後、僅か半年で病により故郷へ戻った。故郷で密かに抗清運動を助けた。詩文には度々節を失った事への悔恨が込められている。《初学集》110 巻、《有学集》50 巻、《投筆集》2 巻がある。また、彼は明詩選集《列朝詩集》、《列朝詩集小伝》を編纂した。この他、《銭注杜詩》、《國初羣雄事略》等がある。（本書第三章第一節参照）

（15）傅山：（1606 一説に 1607～1684）。初名は鼎臣、字は青竹、後に青主と改める。陽曲（山西省太原）の人。早くから文章と気骨に優れ、明が滅びた後は隠遁し、著述・医学を行う。反清復明の志士であった顧炎武らと交際がある。彼は学問の造詣が深く、多才多芸で、詩文を善くし、書画が巧みで、医術に精通していた。《霜紅龕集》がある。（本書第二章第四節参照）

（16）「河嶽」の「気」：明清交替期の激烈な社会変動は文人に現実意識の増強と社会に対する責任感を持つことへの切迫した要求を提出した。傅山も例えば黄宗羲、顧炎武、王夫之と同じように積極的に唱えた。彼は個人の感情の争いをやめて、門戸宗派の家法的論争から抜け出し乱世に注目し、「河嶽」の「気」に関心を寄せた。「河嶽気」とは大地山川の持つエネルギーのこと。（本書 pp96～97参照）

（17）袁枚：（1716～1798）。字は子才、号は簡斎、また随園老人、倉山居士。浙江銭塘（今の杭州）の人。乾隆 4 年（1739）の進士。彼の思想は頗る経から離れ道に叛する色彩が有り、表現は強烈な反伝統的傾向を表す。漢、宋の学に包まれていた学術界と思想界の時代の雰囲気の中で別の考え方を示し、清代中期の個性解放の思想を啓蒙した。その著に《小倉山房詩文集》、《随園詩話》、《子不語》等がある。（本書第七章第二節参照）

（18）清醇雅正：葉燮によると「変わるものの中に変わらないものがあり、一言で言えば雅という。雅とは作詩の源であり、それで詩の流れを尽くすことができる」（《汪秋原浪齋二集詩序》ものであった。彼と王漁洋と朱彝尊は醇雅を詩歌の最高基準となし、これでもって古今の詩人の作品のレベルをはかった。そして言語は典雅であり、内容は純粋であることを求めた。故に宋詩を軽視し、唐音を提唱した。

（19）謝翱：（1249～1295）宋代、建寧浦城の人。字は皋羽、また皋父、号は宋累、晞発子。文天祥が府を延平に開くと郷兵数百人を率いてこれに投じ、諮議参軍となる。文天祥の兵が敗れるに及んで身を引いて、民間に潜伏した。《晞発集》がある。

（20）林景熙：宋代、温州平陽の人。字は德陽、号は霽山。度宗の咸淳 7 年（1271）、泉州教授を授かる。礼部架閣から従政郎に遷る。元兵が南下すると遂に仕えなかった。

清朝にて礼部侍郎管秘書院事となったが、しかし清に降伏した後、僅か半年で病により故郷へ戻った。故郷で密かに抗清運動を助けた。詩文には度々節を失った事への悔恨が込められている。《初学集》110 巻、《有学集》50 巻、《投筆集》2 巻がある。また、彼は明詩選集《列朝詩集》、《列朝詩集小伝》を編纂した。この他、《銭注杜詩》、《國初羣雄事略》等がある。（本書第三章第一節参照）

（15）傅山：（1606 一説に 1607～1684）。初名は鼎臣、字は青竹、後に青主と改める。陽曲（山西省太原）の人。早くから文章と気骨に優れ、明が滅びた後は隠遁し、著述・医学を行う。反清復明の志士であった顧炎武らと交際がある。彼は学問の造詣が深く、多才多芸で、詩文を善くし、書画が巧みで、医術に精通していた。《霜紅龕集》がある。（本書第二章第四節参照）

（16）「河嶽」の「気」：明清交替期の激烈な社会変動は文人に現実意識の増強と社会に対する責任感を持つことへの切迫した要求を提出した。傅山も例えば黄宗羲、顧炎武、王夫之と同じように積極的に唱えた。彼は個人の感情の争いをやめて、門戸宗派の家法的論争から抜け出し乱世に注目し、「河嶽」の「気」に関心を寄せた。「河嶽気」とは大地山川の持つエネルギーのこと。（本書 pp96～97参照）

（17）袁枚：（1716～1798）。字は子才、号は簡斎、また随園老人、倉山居士。浙江銭塘（今の杭州）の人。乾隆 4 年（1739）の進士。彼の思想は頗る経から離れ道に叛する色彩が有り、表現は強烈な反伝統的傾向を表す。漢、宋の学に包まれていた学術界と思想界の時代の雰囲気の中で別の考え方を示し、清代中期の個性解放の思想を啓蒙した。その著に《小倉山房詩文集》、《随園詩話》、《子不語》等がある。（本書第七章第二節参照）

（18）清醇雅正：葉燮によると「変わるものの中に変わらないものがあり、一言で言えば雅という。雅とは作詩の源であり、それで詩の流れを尽くすことができる」（《汪秋原浪齋二集詩序》ものであった。彼と王漁洋と朱彝尊は醇雅を詩歌の最高基準となし、これでもって古今の詩人の作品のレベルをはかった。そして言語は典雅であり、内容は純粋であることを求めた。故に宋詩を軽視し、唐音を提唱した。

（19）謝翱：（1249～1295）宋代、建寧浦城の人。字は皋羽、また皋父、号は宋累、晞発子。文天祥が府を延平に開くと郷兵数百人を率いてこれに投じ、諮議参軍となる。文天祥の兵が敗れるに及んで身を引いて、民間に潜伏した。《晞発集》がある。

（20）林景熙：宋代、温州平陽の人。字は德陽、号は霽山。度宗の咸淳 7 年（1271）、泉州教授を授かる。礼部架閣から従政郎に遷る。元兵が南下すると遂に仕えなかった。

《霽山集》がある。

（21）汪元量：宋代、臨安錢塘の人。字は大有、号は水雲子。度宗の咸淳年間の進士。琴を善くし御所のうちに出入りすることを許される。度宗の咸淳年間に進士となる。その詩は慷慨悲歌の気節が有り、多く国亡北徙の事を記し後人は推して詩史と為す。《水雲集》、《湖山類稿》がある。

（22）馮班（1614～1681）：馮舒の弟。字は定遠、号は鈍吟老人。虞山詩派の重要な作家。馮舒、馮班兄弟は銭謙益の同郷で、学生であった。清朝に入っては仕えなかった。《鈍吟集》、《鈍吟文稿》、《鈍吟雑録》等がある。（本書第三章第一節参照）

（23）呉偉業：（1609～1672）字は駿公、号は梅村。太倉（今の江蘇に属す）の人。早くに張溥に師事し復社に参加した。明崇禎4年（1631）に進士となり、順治年間には国子監祭酒に到ったが、母の喪のために帰郷し、そのまま郷里で余生を送る。その詩は唐詩を模範として才気にあふれた華麗な表現を持ち、明代諸派の詩文主張において前後七子の詩歌を尊重し、唐宋派の散文の傾向を正道とみなした。《梅村家蔵稿》、《梅村詩話》等がある。（本書第三章第一節参照）

（24）屈大均：（1630～1696）初名は紹隆、字は翁山。またの字は介子、泠君、騒余。広東番禺（今の広州）の人。明の諸生。かつて抗清運動に参加したが明が滅びると、僧になり還俗し儒家となった。詩で名高く陳恭尹、梁佩蘭とともに「嶺南の三大家」と言われる。彼は屈原を生涯敬い自分を屈原の後裔とみなした。その著に《道援堂集》、《翁山詩略》、《翁山詩外》、《翁山文外》があり、また《廣東文選》等を編選した。（本書第三章第二節参照）

（25）賀貽孫：（1605 一説に 06～卒年不詳）字は子翼。水田居士と号す。江西省永新の人。明の諸生、詩古文に巧み。清朝となるや試験に応じることを拒み志を高くして山に入る。明末清初、公安派と竟陵派が相続いて多くの批評家となり、対象を討伐したが、彼は両派を庇護し彼らの詩歌創作と詩論の価値を肯定した。その著に《水田居集》、《詩筏》等がある。（本書第三章第三節参照）

（26）朱鶴齢：（1606～1683）呉江（今の江蘇呉江）の人。字は長孺、号は愚菴。清代になると、科挙を放棄し専ら著述活動を行った。学術上、黄宗羲、顧炎武、銭謙益の影響を受け、中でも顧炎武の影響を最も受けた。箋疏の学に長じ著書は四十余種ある。世に行われた詩文集として《愚菴小集》、《杜工部集輯注》、《李義山詩集箋中注》、《詩経通義》等がある。（本書第三章第二節参照）

（27）申涵光：（1620～1677）字は孚孟、号は鳧盟、晩年に臥樗老人と号した。永年（今の河北に属す）の人。清に入ると母の死を理由に隠遁して戻らず、出仕するのを拒絶して官位のないまま終えた。彼は河朔詩派の代表で、明末清初の詩壇に北方文学の剛勤厚重の気風を注入した。彼は唐詩へ回帰し、その中でも杜甫を崇拝し、杜甫の詩の内容が豊富で表現が自由であり悲鬱の趣があることを好んだ。（本書第三章第二節参照）

（28）金聖嘆：（1608～1661）原名は采、字は若采、又の名は喟、号は聖嘆。長洲（今の江蘇蘇州）の人。順治18年、学生を扇動したとみなされ、反抗の首謀者の一人として処刑された。彼の性格は狂傲で奇気に富んでいた。詩文の批評に長じ、独自の批評眼を持っており、各書の批評を試みている。彼が評点した主要なものは、《水滸伝》、《西相記》、《天下才子必読書》、《唐才子詩》、《杜詩解》等があり、また彼の著書としては《沈吟樓詩選》があり、その他雑著が多数ある。（本書第四章第一節参照）

（29）公安派：明末の文壇の一派。湖北省公安の人である袁宗道、袁宏道、袁中道の兄弟を首唱者とする。公安派はそれまでの擬古派に対抗する勢力となったが、その主張は李贄の文学価値は作者の精神が純粋に表現されているか否かにかかるものだという説を継承する。清初の銭謙益がその流れを汲んだため非常に流行したが、その後衰えた。

（30）竟陵派：17世紀初の文学流派。中心人物は鍾惺と譚元春で二人とも竟陵（湖北省天門県）の人であったためこの名が有る。彼らは擬古派に反対する点では公安派の主張を継承するが、公安派の軽薄な言いまわしの巧みさを競う欠点を救うため、寂しさと悲哀との陰影の表現に力を注ぎ多くの共鳴者を得た。

（31）帰有光：（1507～1571）江蘇省崑山県の人。字は熙甫、号は震川。幼少より文章に優れ、やや長じては経史に精通した。彼の古文はその教養を反映して、経典に基づき《史記》の精神と理法を会得したもので雄大なところはないが、唐の韓愈、宋の欧陽脩に近く、王慎中、唐順之と並んで「嘉靖の三家」と言われた。

（32）批評的参照：原文は「借鑑」、鏡を借りて明らかに照らすことで、北斉の劉昼《新論・貴言》に「人目短於自見、故借鏡以観形」と有り、「借鑑」或いは「借鏡」は他人の経験、教訓を借りて自分に照らし戒める事である。

（33）博学鴻詞科：清代の制科の一つ。臨時の勅により、常設の科挙では取士できない特別卓絶の学行兼優、特に文詞の優位なる人材を得るために康熙帝が創設したもの。該科の目的の一つは明の遺臣老儒を収攬するものであった。なお、竹村則行「康熙十八年博学鴻詞科と清朝文学の出発」（中国文学論集第9号1980）参照。

（34）文字の獄：中国における筆過事件の総称のことだが、特に満族支配の清朝によく見られた。「通観するに康熙・雍正・乾隆の三代にわたって繰り返された文字の獄には、ほとんど内容がなくて、単なる形式上の嫌疑にすぎぬものが、ことのはずみに重大化したものが多い。特に攘夷思想が問題となり、その攘夷思想は明末の歴史に関して問題とされる。これは清朝の天子みずからが異民族たることにコンプレックスを感じていたためである。」（宮崎市定「清帝国の繁栄」《宮崎市定全集 13》岩波書店 1992 年参照）

（35）施閏章：（1618～1683）字は尚白。号は愚山、また蠖齋と号し、晩年には矩齋と号した。宣城（今の安徽に属す）の人。順治 6 年（1649）年に進士に及第し、刑部主事、員外郎などを歴任した。康熙 6 年（1667）年に官職を辞し十余年郷里にいたが、康熙 18 年（1679）博学鴻詞科に応じ、翰林院侍講となり、《明史》の編修に参加し、侍讀に進んで没した。詩文に巧みで、特に詩は宋琬と並び称されて「南施北宋」といわれ、清初詩壇の代表的大家であった。その詩は「温柔敦厚」と評されているが、盛唐の詩を範とし、「比興」ということを重んじ、詩は高潔な人格の現れでなければならないとした。著に《学余文集》、《学余詩集》、《矩齋雑記》、《蠖齋詩話》等がある。（本書第五章第一節参照）

（36）宋琬：（1614～1674）字は玉叔、号は荔裳、莱陽（今の山東に属す）の人。若い頃から才名があり、順治 14 年（1647）に進士に及第。官は戸部主事から地方官を歴任し四川按察使に至った。彼は施閏章とともに「南施北宋」と称されたが、二人の風格は同じではなく、沈徳潜は《清詩別裁集》の中で「宋は雄健磊落を以て勝り、施は温柔敦厚を以て勝る」とその作風の違いを述べている。《安雅堂集》、《祭皋陶雑劇》等がある。（本書第五章第一節参照）

（37）朱彝尊：（1629～1709）字は錫鬯、号は竹垞。秀水（今の浙江嘉興）の人。明が滅びた後、江南の志士の抗清復明活動に参加し、事が破れた後逃げ回った。康熙 18 年（1679）に博学鴻詞科に応じ、翰林院検討に任官して《明史》の編纂に参画し、彼が史館総裁に贈った意見書によって《宋史》以後立てられてきた道学伝が廃止された。晩年に官を辞し帰郷し著述活動でその身を終えた。彼は広く経史に通じ、詩詞散文に優れていたが、最も詞で名高く、陳維崧とその名を斉しくし、清初の詞檀の大御所で、浙西詞派の創始者となった。著に《経義考》、《曝書亭集》等があり、《明詩綜》、《詞綜》を編纂した。（本書第五章第三節参照）

（38）王士禎：（1634～1711）字は子眞、また胎上、号は阮亭、漁洋山人と号した。山

東新城（今の桓臺）の人。順治 12 年（1658）の進士。諸官を歴任して刑部尚書となり 78 歳で没した。当時の詩人の第一人者であり、詩ばかりでなく古文も填詞も得意としたが詩論においては神韻を重視した。著に《帯経堂集》、《池北偶談》、《香祖筆記》、《漁洋詩話》等がある。（本書第五章第三節参照）

（39）趙執信：（1662～1744）字は伸符、号は秋谷、晩年に飴山老人と号した。益都（今の山東に属す）の人。康熙 18 年（1679）18 歳で進士に及第。翰林院の編修となり地位を上げたが、皇后の服喪期間中に飲酒観劇したために弾劾され免官された。王士禎の姪婿として初め彼に詩の教えを請うたが、のち攻撃し合う仲となった。著に《飴山堂集》、《談龍録》、《声調譜》等がある。（本書第五章第三節参照）

（40）査慎行：（1650～1727）海寧（浙江杭州）の人。字は夏重、のち悔余、号は他山、初白。康熙 42 年（1703）の進士。翰林院編修となり、皇帝に詩才を認められたが官僚生活になじまず辞職して田園に帰った。詩風は宋の蘇軾を模範として修飾を用いない自然の妙趣を尊んだ。《敬堂集》50 巻がある。

（41）桐城派：安徽省桐城の人方苞が首唱し同県人の劉大櫆・姚鼐と継承され「天下の文章は桐城にあり」とうたわれたためこの名がある。彼らの文章は模倣を戒めたため、必ずしも一様の文体は持たないが、共通するのは温雅で平易な中に文語文の格調を守ろうとする態度である。この派には管同、方東樹らの著名な後継者があり、また清末の大御所曽国藩もでたため、清朝の最後まで文壇の中心勢力を形成した。

（42）戴名世：（1653～1713）字は田有、一字は褐夫。安徽桐城の人。康熙 48 年（1709）進士となり、翰林院編修を授けられたが、康熙 52 年 2 月に殺された。彼は「桐城三祖」ではないが、桐城派の形成に重要な作用を及ぼし、桐城派の人々に影響を与えた。《潜虚先生文集》、《戴南山先生全集》等がある。（本書第六章第四節参照）

（43）方苞：（1668～1749）安徽桐城の人。字は鳳九、号は霊皋。彼は学術上、程朱の学に基づいた。文章は唐宋の古文を尊んだ。三《礼》と《春秋》に長じ、文章は静重簡雅で桐城派古文の気風を開いた。批評面においては、特に「義法」を以て中心とする散文理論を提出し、後の桐城派の文論の基礎を築いた。（本書第六章第四節参照）

（44）陳維崧：（1626～1682）字は其年、号は迦陵。宜興（今の江蘇に属す）の人。50 歳を過ぎて康熙 18 年（1679）に博学鴻詞科に第一で及第し、翰林院検討を授けられ《明史》の編集に当たり、まもなく病没した。駢文と詞の作に優れ、駢文家としては明末駢文復興の気運を受けそれを推進した。詞においては陽羨詞派の首領として豪放をもって聞こ

えた。《陳迦陵文集》、《湖海樓詩集》、《迦陵詞》がある。(本書第九章第二節参照)

(45) 司空図：(837～908) 字は表聖、号は耐辱居士、知非子。虞郷（山西省）の人。咸通年間の進士。唐朝の崩壊期でまた文学も衰えた唐末において気品のある傑出した詩を作った。これまで《二十四詩品》は司空図の撰であるとされてきたが、近年上海復旦大学の陳尚君、汪湧豪両氏によって、明末に作成されたとする偽作説が提出された（《中国古籍研究第一巻・司空図二十四詩品辨偽》上海古籍出版 1996.11)。その論拠は大いに説得力があると思われる。

(46) 厳羽：生没年不詳。字は儀卿、号は滄浪逋客。一生、官吏として使えず、そのため《宋史》にもその伝記が見えない。《滄浪詩話》の著者として名高く、その詩論は王士禎の神韻説の基づくところとなった。

(47) 葉燮：(1627～1703) 字は星期、号は己畦。呉江（今の江蘇に属す）の人。康熙年間に進士となり寶応知県となったが弾劾されて帰る。後に仕官の考えを捨て遍く四方に遊して没した。ここの「雅」と、彼の言うところの「温柔敦厚」は大変近く、即ち根源を指し、「雅」は詩の常に変わらない原則であり、そこで古今異なる詩歌の風格は発展変化した。しかしすべて我の一種の表現なのである。《己畦詩集》、《己畦文集》がある。(本書第五章第二節参照)

(48) 候方域：(1618～1655) 字は朝宗、号は雪苑。河南出身で若くして才名があり、方以智、陳貞慧、冒襄と名を斉しくし「明末四公子」と称された。彼は名門の出身であったが、生活は放蕩で、詞壇で活躍していたが、30 才になって悔い改め、古文に力を尽くして、汪　、魏禧とともに清初古文三大家と称された。唐宋の古文を継承し、韓愈と歐陽脩を敬った。《壮悔堂文集》、《四憶堂文集》がある。(本書第六章第一節参照)

(49) 汪琬：(1624～1690) 字は苕文、号は鈍翁、長洲（今の江蘇呉県）の人。順治 12 年（1655）進士となり、康熙 9 年（1670）病気を理由に帰郷し門を閉じ著述活動を行った。康熙 18 年博学鴻詞科に応じ短期間《明史》を編修した。《鈍翁類稿》、《續稿》がある。(本書第六章第一節参照)

(50) 魏禧：(1624～1680) 字は凝叔、一字は叔子、号は祐斎、勺庭。江西寧都の人。康熙 17 年（1678）に博学鴻詞科に召されたが病気で以て堅く辞した。文章を以て知られ、その作風は凌厲雄傑で、最も論策に長じている。《魏叔子文集》、《日録》、《左伝経世》等がある。(本書第六章第二節参照)

(51) 廖燕：(1644～1705) 初名は燕生、字は夢醒、また名人、号は柴舟。曲江（今の

広東詔関）の人。経史に心を尽くし読書著述活動でその身を終えた。最も散文創作に力を尽くした。彼の思想は頗る道に背く色彩があり、彼は幼いときより功名を蔑視し、さらに理学家の講学の風気を遵守することを不満とした。《二十七松堂集》がある。（本書第六章第三節参照）

（52）蔡世遠：清代、漳浦の人。字は聞之、号は梁村。代々漳浦の梁山に居り、学者は梁山先生という。康熙の進士。業を張伯行に受け、力めて正学を学ぶ。官は雍正中禮部侍郎となる。

（53）浙西詞派：浙西詞派は龔翔麟編刻の《浙西六家詞》によってその名が付けられたが、広義的な浙西詞派のその成員は六家に限らず、詞人の戸籍も浙西に限らない。実際上朱彝尊が中心となり浙西籍の詞人を中心に近隣地域の詞人も包括される。前期詞論の中心は朱彝尊・汪森などであり、彼らが共同して編選した《詞綜序》に具体的な詞学の宗旨が示されている。（本書第九章第三節参照）

（54）汪森：（1653～1726）字は晋賢、号は碧巣。彼が書いた《詞綜序》は浙西詞派の重要な詩論である。この篇序の中でまず詞の文学的地位を高め、「詞は詩余である」等の詞体の偏見に反対した。（本書第九章第三節参照）

（55）姜夔：（1155～1221）南宋の詞人。字は堯章、号は白石道人。彼の詞風の特色を概括すると、「句琢字練、帰於醇雅」である。この八字が後の浙西詞派の詞論を最も簡明に表している。（本書 P 694 参照）

（56）陽羨派：清初の詞壇で最も勢力を誇ったのが陳維崧を中心とする陽羨派と朱彝尊を中心とする浙西詞派であった。両家は互いに尊重し競い合っていた。陳維崧の《任植斎詞序》で自ら「庚虎、辛卯間」（順治 7 、 8 年、彼が 26、7 歳の時）に雛祗謨・董以寧と「倡和」を開始し、詞風を扇動したという。（本書第九章第二節参照）

（57）原文は「爨弄俚詞」、「爨弄」は金・元代の院本（行院でうたうのに用いられた芝居の台本）の別称。

（58）陳玉璂：（生卒年不詳）、字は賡明、号は椒峯、江蘇武進（今の常州）の人。康熙 6 年（1667）進士となり、康熙 18 年博学鴻詞科を試すも、罷めて帰る。彼は当時において頗る文名があり、とりわけ魏祥、魏禧兄弟と善く交際した。魏兄弟と陳とはお互いの文章を高く評価し、故に陳の文論の主張と魏氏兄弟のそれとはよく似ている。彼の文論は実用を強調し、明人の浅薄で空疎な士風と空談心性、実際の習気の離脱に満足していない。《学文堂文集》がある。（本書第九章第二節参照）

（59）劉大櫆：（1698～1779）字は才甫、一字は耕峯、号は海峯。安徽桐城（今の樅陽県境内）の人。彼は方苞を受け継ぎ、姚鼐とともに桐城派の「三祖」の一人に数えられる。しかし、彼の文章の風格と文論の主張は方苞と完全には一致しない。彼の文章は奇異で力強いものであって、方苞の簡潔深厚と同じではない。（本書第八章第一節参照）

（60）姚鼐：（1732～1815）、字は姬傳、一字夢穀、書斎を惜抱軒と名付けたので、惜抱先生と称された。安徽桐城の人。乾隆28年進士となり、《四庫全書》の編纂官に充てられたが、二年足らずして官を辞し郷里に帰った。彼は若いとき伯父の姚範から経史と古文を学び、さらに劉大櫆に随い古文の作法を学び、彼から桐城派の学を受け継いだ。著に《惜抱軒全集》、《惜抱先生尺讀》等があり、《古文辞類纂》、《五七言今体詩鈔》、《唐人絶句詩鈔》等を編纂した。（本書第八章第一節参照）

（61）納蘭性徳：（1655～1685）原名は成徳、小名は冬郎、字は容若、号は楞伽山人。満州正黄旗の人。康熙12年（1673）進士となり、一等侍衛に至る。彼が詞を創作したのは朱彝尊、陳維崧より遅いが、当時の詞家として早くから彼らと文名を斉しくした。宋元以来の経学書を集め《通志堂経解》一千八百余巻を編集する。《通志堂集》がある。（本書第九章第一節参照）

（62）萬樹：（1630前後～1688）江蘇宜興の人。字は紅友、また花農。号は山翁。国子監生。詞曲に巧みで伝奇及び雑劇二十余種を作る。詞律に詳しい。《詩律》、《香胆詞》、《拥双艶三種曲》等がある。

（63）陳廷敬：清澤州の人。字は子端、号は説巌、午亭山人。順治の進士。官は文淵閣大学士家兼史部尚書。

（64）王奕清：清代、江蘇太倉出身。字は幼芬、号は拙園、王掞子。康熙30年（1691）の進士。官詹事を歴任する。雍正4年（1726）、世宗は奕清と弟奕鴻にアルタイ軍の前線に赴くように命じた。乾隆の初めよびもどされたがまもなく卒した。書を善くし絵画に巧みであった。